

こうざえもんつうしん 講左衛門通信

平成 29 年 8 月 27 日

第 9 1 号

発行 天台宗忍草山東円寺
〒401-0511
南都留郡忍野村忍草38
☎ 0555-84-4114

『残暑が厳しい日々じゃが、皆変わりのないかのう。お盆が明けると秋を意識するようになるが、富士登山も吉田の火祭りが終わると登山シーズンが終わるのう。昨日と今日は、日本三奇祭「国指定重要無形文化財」吉田の火祭りが行われているぞ。26日は「鎮火祭」27日は「すすき祭」と言われているんじゃ。ニュースなどに放映される有名な光景は、26日に行われている高さ3メートルの筍型に結い上げられた大松明70余本、家毎に井桁に積まれた松明に一齐に点火され、街中が火の海と化した風景じゃ。27日のすすき祭は、すすきを手に持ち神輿の後に続く、神輿と見物客とが一体になって夕闇の境内を廻る様子は幻想的じゃ。』

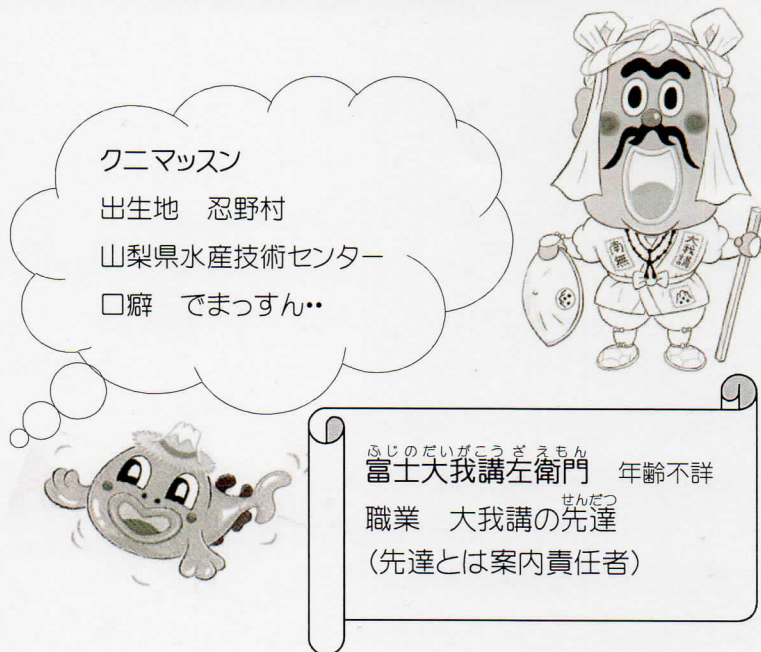
『おいらは、火祭りの歴史を調べたでまっすん。元来火祭りは、浅間神社ではなく諏訪神社の祭礼で、諏訪大社の祭神（建御名方神<たけみなかたのかみ>が国譲りの力比で負け、信濃の国諏訪湖に追い込まれ、松明を燃やすことによって、寄せ手が援軍と思いきっていった。これが7月21日の夜だったという説があるでまっすん。明治時代には陰暦7月21日の月遅れで8月21日・22日に火祭りは行われていたでまっすん。それ以後、様々な話し合いがされて、大正時代になり、現在の8月26日・27日に固定化されたでまっすん。』

『よく調べたのう…火祭りには清浄であることが求められ、特に死のケガレに対しては厳しい決まりがあったようじゃ。現在でもその風習は残っておるぞ。江戸時代の「富士日記」には「不幸のあった家は1年の間社参を止め、祭りに会うことはいけない、火を挙げない、祭りが終わったら即家に帰る。これをテーマに出るとい」と記載があるんじゃ。不幸があることをブク(服)がかかると言い、ブクの家のは、火祭りのお神輿や火を見ることを避けなければならないんじゃ。ブクの年の火祭りは、忌みのために火祭りに支障があったり、不幸が起こってはいけないので、泊りがけで町の外の親類の家や旅行に出かけたんじゃよ。これを、テーマに出ると言って、近所からブクの家にはテーマ見舞いとしてうどん粉やそば粉などがタマワブチという漆器桶に入れて贈られたんじゃ。』

『興味深い話でまっすん。忍野村でも、秋の諏訪大祭はブクを言うでまっすん。地域独特の風習は、その起源について語られることは少ないでまっすん。風習だけが残り、時代とともに忘れられていくでまっすん。それは、大切な文化が失われて行くということだでまっすん。』

『そうじゃな。「秋祭りは、ブクだから逃げる…」と聞き、それはどういうことですか？と、誰かに質問されて、その質問に答えることが出来ないことは残念なことじゃ。火祭りについて調査したことによって、とても勉強になったぞ。さて、今回は、89号の続きを話そうと思っておるぞ。』

『富士山について、もっともっと調査するでまっすん。楽しみでまっすん。』



クニマツソン

出生地 忍野村

山梨県水産技術センター

口癖 でまっすん…

ふじのだいがこうざえもん
富士大我講左衛門 年齢不詳
職業 大我講の先達
(先達とは案内責任者)